朝日新聞
DIGITAL

大谷翔平の指導者が捨てた「常識」 才能をだめにしないロジックは

有料会員記事

聞き手・ 高久潤　2021年11月18日 10時30分

花巻東高校硬式野球部監督の佐々木洋さん

日本では「ずば抜けた人材」が育ちにくい――。こんな従来のイメージを覆す活躍を見せる若者が、スポーツや文化芸術の世界で増えている。日本人で20年ぶりの最優秀選手（MVP）の期待がかかるメジャーリーガーの 大谷翔平 選手や、菊池雄星 選手らが輩出した花巻東 高校野球 部の佐々木洋監督に、「異才」の育て方を聞いた。

指導や練習方法が原因　開花させられない才能

――メジャーリーガーとして活躍する選手は高校生の頃から他の選手とはまったく違うのですか。

「大谷を最初に見た時はびっくりしました。すごい速い球が投げられるわけじゃないんですけど、リーチが長くてとてもしなやかだった。これは高校3年間でどうなっちゃうんだろうと思いました。ただ、すぐにメジャーリーガーになる姿を思い描けたわけではありません。もっと言えば、日本のプロ野球で ドラフト 1位になるとも思いませんでしたね」

「一方で菊池を見たときは怖いと思いました。これは誰が指導しても ドラフト 1位になるな、と。ひょろひょろしていて 筋肉 もそんなにないのに、関節の可動域が広いから、体格にしては速いボールが投げられる」

――選手の才能をみるときのポイントはどこですか。

「身体能力は重要です。子どもに親の骨格は遺伝するので、親も観察します。さらに重視するのは、親が子どもにどんな言葉をかけているか、他の親とどんなふうに接しているか。親の育て方や考え方で子どものマインドは変わり、伸びしろに差が出ると感じています。例えば、小中学生ですごく活躍している選手であっても、その時のパフォーマンスだけを参考に判断することはありません」

――才能は、監督の指導次第で開花するということですね。

「指導者で才能が開花するというのはうそだと思います。大谷や菊池を私が育てたとは恐ろしくて言えません。どこで育っても、あのレベルになったのではないでしょうか。私は自分なりの経験と勉強で選手の才能を開花できるように、と考えていますが、育て方に正解はないと思っています。毎年、大谷や菊池みたいな選手が出ているなら『育てた』と言えるかもしれませんが、そうじゃない。そもそも『育てた』かどうかは育てられた側の選手が決めることです」

「この2人や佐々木朗希（現・ 千葉ロッテマリーンズ ）ら東北出身の選手が活躍しているから、なぜ最近東北からすごい選手が出るようになったのか、とメジャーリーグや日本の球団関係者から尋ねられます。私は以前もすごい才能の選手はいたと答えます。指導や練習方法が原因で開花させられなかったと考えているからです」

――手厳しいですね。

「指導によってすごい選手を生み出すことは難しいが、だめにしてしまうのはたやすいと思う。野球の世界は伝統と経験がものをいいます。これまでは子どもの才能も、指導する側が『あの人がこうやった』『こう言った』などの理由で判断してきました。でも、大谷や菊池のような逸材であれば、才能があることは指導者であれば誰でもわかります。才能というものを細かく考えていくと、そんなに簡単な話ではないのではないか、と思います」

指導者が選手の才能を「だめにしてしまうのはたやすい」と話す佐々木監督。記事後半では、「常識外れ」と言われた二刀流・大谷選手を生み出したロジックに迫ります。

――どういうことでしょうか。

「私は 国士舘 大学で大学野球を経験し、 高校野球 の監督として 甲子園 を目指そうと決意しました。地元の岩手に戻る前、神奈川で野球指導者としての勉強をしました。当時、東京のリトルリーグで活躍していた 松坂大輔 とそのチームを見た時は衝撃を受けました。東京と岩手の選手の才能はこんなにも違うのか、と。実際、『東北は野球が弱い』というのは地元でも一般的な認識でしたから、それが裏付けられたという感覚でした」

「岩手で 高校教師 になり、『才能の違い』とはどういうことか、を突き詰めて考えるようになりました。東北の子どもたちを見ていると、体もでかいし、 運動神経 もいい。少なくとも身体的には東京や神奈川の選手と比べて劣っているどころか、恵まれていると言ってもいい。なのになぜ結果が違うのだろう、と疑問がわきました」

――その理由とは何ですか。

「思い至ったのは指導法や練習法でした。東北の冬は雪深く、実戦練習ができない。だから走り込みをしたり、雪を固めてサッカーをさせたりしていた。下半身こそ基本だ、とか言って。ただ、当たり前ですが、野球は前から来るボールを打つ競技です。それができるようになるための練習を考えないといけない。一般論として走り込みは大事です。でも、本当にひたすら走り込めばマラソン選手のように

下半身が細くなってしまう。野球選手に求められるものとは違います。実際、うちの学校では投手はあまり走らせていません」

「大谷も菊池も高校入学時から20キロ以上体重を増やしました。寮生活で白米をたくさん食べさせたんです。本当は炭水化物よりも、たんぱく質をたくさん取らせたほうがいい。でも経済的な制約があるなか、体をサイズアップさせました。特殊なボールを使った室内練習などで冬も野球ができるように工夫しました。こうした変化はうちだけではありません。近年、東北や北海道の高校が強くなっているのは指導法が変わったからです。裏を返せば、それまでは多くの才能が指導によってつぶされてきた、といえる。指導とは本当に恐ろしい。想像以上に『こうしたもんだ』という常識に支配されており、かつその常識はロジックや合理性を伴わないことが多いと感じています」

大谷は野球とベースボールをバージョンアップした

――大谷選手の二刀流は当初、常識外れと言われていました。

「そうですが、ロジックで考えれば別に新しいことではありません。多くの投手は小学生から高校生の時までは野手もやっています。それをわざわざ二刀流とは言いません。プロになるとどちらかに絞るのが通例ですが、大谷の場合、米国では投手としての、日本では打者としての評価がもともと高かった。だから、日ハム入りすることになった時に将来のメジャー入りも見据えて両方やらせてほしいと、球団側にお伝えしました。けがなどでどちらかがだめになっても、やっていけるよう様々な可能性を残すのが大事だと思いました。自然な流れでした。どちらかしかできない人もいますが、どちらもできる可能性もあると考えていました」

「それが、米国でも驚くべきことだと受け入れられた。大谷は日本の野球だけではなく、米国のベースボールの『当たり前』を変えた。野球界に新しいソフトをインストールした存在なんだと思います。おそらくですが、これから米国で二刀流の選手は出てくるでしょう。もちろん並外れた能力が必要なのは前提ですが、これまでだって二刀流ができた選手はいたと思います。でも、『こうしたもんだ』という常識によって、その可能性はつぶされてきたのではないか。もっと野球は面白くなるという意味で、大谷は野球とベースボールをバージョンアップした。そこが何よりも彼のすごいところなんだと思います」

――野球に イノベーション（技術革新）を起こした、と。

「私はビジネスの発想を参考にしています。まずは適性を見極め、本人に合わせたポジションや役割にあわせて才能を伸ばしていく。日本は野球に限らずだと思いますが、その才能の見極めがあまりに早すぎると思います。米国の場合、様々な競技を経験させて適性を探った後に選びます。競技の特性に合わせた練習のスタートが遅れるデメリットもありますが、バドミントン や ラグビー でもっと活躍できる子どもを、野球と決めつけたらもったいない」

「『よい野球選手』といっても、みんなが大谷や菊池のようなタイプである必要はない。身体能力も違う。そのときに野球というゲームのなかで、最大限のパフォーマンスを発揮する形にはいろんなパターンがある。おそらく企業でも同じではないかと思います」

「私が指導で最も重視しているのは、考え方のインストールです。部員たちには目的と目標の違いを伝え、目標達成のための数値を明確にし、こと細かく設定させます。大谷や菊池はこのときに、すでに目標としてメジャー入りをあげていました。高校を卒業しても、人生は続きます。何をするにせよ生きていくには、この考え方が欠かせない」

「大谷の一つ下の学年のうちの選手が四球での出塁をねらい続け、批判されたことがありました。彼は体が小さかったんですね。ちょっと卑屈になっているようにも見えた。だから私は言っていたんです。『身長を伸ばすなよ、投手は投げにくいんだからな。おれは出塁率をみているからな』。その結果なんです。野球はチームで点数を競います。必要な能力は多様です。なにもみんなが大谷みたいになる必要はない」

盆栽と指導者の共通点　環境を整えて意識を変える

――大谷選手の活躍以外にもうれしいことがあったそうですね。

「今春、野球部の卒業生が2浪して 東京大学 に合格しました。彼は非常に学力が高かったので、私は野球ではなくその素晴らしい学力で生きていくべきだと伝えました。彼は東大という目標を掲げ、実現した。当時の東大野球部監督に尽力いただき、2年生の時に面談や指導を受けました。その後も午前中は大学の練習に参加させてもらったり、午後は現役生に勉強を教わったりしました」

「私は盆栽が趣味なのですが、指導者の仕事と似ています。盆栽は若木のときに枝に針金をつけて方向付けます。すると、ある程度かたちが整って価値を増して輝く。必要であれば針金を掛けたり、時には外したりする。器を変えれば、根が大きく張って、幹も太くなる。環境を整えて、子どもたちの意識を変えて意欲を促していくということです」

「子どもの才能を開花させるにはこうした強制が必要なタイミングがあります。その点で、最近の教育は放任や自主性の重視に偏り過ぎているように感じます。もっとも、まったく強制を必要としないタイプもいるのでそこは難しいのですが……」

――ただ大谷選手や菊池選手のような圧倒的な才能が近くにいたら、他の選手がくさったり、足をひっぱったりはしませんか？

「うちでは幸いなことにありません。いまの 高校野球 で投手は複数必要なので、圧倒的なエース1人に頼るチームにしていないということもあります。飛び抜けた才能の子がいても、それ以外にも枠がある。その才能に他がひっぱられて周りの力が引き上げられていく相乗効果の方が大きいですね」

画一的な「システム」をはめるより「カスタム」が必要

――そんなにうまくいくものでしょうか？

「だから、多様性を重視しています。苦い経験があります。（菊池）雄星が高校1年の夏、 甲子園 で0対1で負けました。あの時のチームは左バッターの似たタイプをずらっとそろえていたんです。すると相手投手の術中にはまってしまい、まったく打てなかった。違うタイプの選手がいれば状況は変えられた。今はよく使われてきれいごとのように思われがちですが、多様性は勝負の点でも欠かせない要素です」

「つくづく感じるのは、『こうしたもんだ』という常識を、私も含めて指導する側が暗黙のうちに持ちすぎていることです。細かいことですが、練習で2列になって足をそろえて走る光景がありますよね。あれって変だと思いませんか？　実際のプレーで、似た動きをすることはありません。いまの日本の指導者はもしかすると画一的な『システム』に子どもたちをあてはめすぎているように感じます。むしろこれから必要なのはカスタムではないでしょうか」

――どういうことですか？

「スポーツでいうならば、人間には間違いなく、身体的な特徴の違いがある。大谷のような身体や運動能力がある人間と、そうではない人間には必要な練習が違います。指導者は各選手に合わせた練習やアドバイスをしなければなりません。ときには野球に向いていない子どもに、他のスポーツや進路を勧めることもあります。これはあきらめではない。見極めなんです。子どもたちは高校を卒業したあと、この競争社会で生き抜いていかないといけないのですから」

――それぞれの才能を生かす場を探すべきだということですか。

「あえて言いますが、運動能力なんてたいしたもんじゃないんですよ。人間は老いれば若いころのように体は動かなくなります。大谷だってそう。どんなに大谷がすごい選手で、野球の歴史を変えたとしても、80歳になっても今のように野球ができるわけじゃない」

「私は 渋沢栄一 の『論語と算盤（そろばん）』が好きなんですが、野球選手にとって運動能力は算盤です。でも、一生は使えない。だからこそ考え方や生き方といった論語の部分が大事です。社会はいつも不平等だし、競争を強いられる。誰もが大谷や菊池になれるわけではない。でも、幸いなことに、勝負するフィールドは自分の発想で選べるし、変えられるのです」

「運動会の徒競走でいつも最下位で恥ずかしいと思う子がいるとします。でも順位をつけないのは変でしょう。運動会で、少しでも順位を上げるためにどうしたらいいか、競争で脱落しない方法を伝えて考えさせる。また、自分は運動は最下位でいいから、勉強でトップになる、と考えてもいい。最初から子どもに見極めさせるのは難しいから、大人が少し助けてあげる。才能をつぶさないってそういうことだと思います」（聞き手・ 高久潤 ）

◇

1975年生まれ。 岩手県出身 。2002年から花巻東高校硬式野球部の監督を務める。05年夏に 甲子園 に初出場し、これまで春夏通算11回出場。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.